

## 原 著

## 全盲学生に対する対人魅力に及ぼす障害開示条件の効果

富田 朝未\*・相羽 大輔\*\*・河内 清彦\*\*\*

本研究は全盲学生の対人魅力に及ぼす障害開示の効果をも、周囲に働きかける程度が異なる障害開示条件（ポジティブ条件・ミドル条件・ネガティブ条件）によって比較検討した。参加者は270名の健常学生であり、全障害開示条件の開示文を提示した後、自己開示認知項目、印象形成尺度、対人魅力尺度への回答を求めた。その結果、キャンパス内交流場面において、全盲学生が初対面の同性を相手に障害開示をする場合は、障害の説明や援助要請を積極的に行うことが対人関係に効果的であることが明らかとなった。また、障害開示の効果は、開示者と被開示者の関係が女子同士の方が男子同士よりも効果的であり、視覚障害者との接触経験のある者の方がいない者よりも効果的であるため、これらを考慮した開示相手の選択が重要であると示唆された。今後は、異性間における障害開示の効果を検討すること、障害開示と対人魅力と援助行動との関係性を検討することの必要性が指摘された。

キー・ワード：対人魅力 自己開示 障害開示 全盲学生 健常学生

## I. 問題と目的

昨今、わが国においても重度視覚障害学生（全盲学生）が障害のない学生（健常学生）と大学で共に学ぶ機会が増えてきている（日本学生支援機構, 2007）。このような全盲学生が学生生活を円滑に送るためには、健常学生から支援を受けることが不可欠であるが（河内, 2002, 2006）、彼らに対する支援は不足していることが報告されている（国立大学協会第三常置委員会, 2001）。

これは、障害条件そのものが健常学生と障害学生との対人関係を阻害するため（Huure & Aro, 2000）、全盲学生に対する健常学生の態度は否定的であり（川間, 1996; 河内, 1990; 河内・四日市, 1998）、全盲学生に対する健常学生のイ

メージも、健常学生から好まれる対象ではなく、むしろ抵抗を感じる存在となっているためと考えられる。さらに、全盲学生は対人魅力の面では健常学生とは相反するイメージが持たれていた（河内, 2001）。このように、イメージが健常学生と相反していることは、健常者との対人関係を構築する上で、重大な阻害要因となるであろう。

ところで、社会心理学の領域では、対人魅力が他者との対人関係を構築する上で重要な役割を持つとされてきた。ここでいう対人魅力とは、「他者に対する好き嫌い」のことで（奥田, 2002）、その主な規定要因には、熟知性、類似性、返報性、身体的魅力の4つが取り上げられている。熟知性とは、その人のことをどれだけ知っているかということであり、よく知っている人ほど好意が生じるという。類似性とは、価値観や経験が似ているかということであり、自分と似たような価値観や経験を有する人を好むという。

\* 視覚障害教育・心理・福祉研究会

\*\* 筑波大学大学院人間総合科学研究科

\*\*\* 筑波大学大学院人間総合科学研究科（障害科学系）

返報性とは、好意を持たれるとその人に好意を持つということであり、好意を示してくれた相手に強い魅力を感じるという。身体的魅力とは、容姿が端麗かということであり、望ましい容姿をもつ人に好意が生じるという（潮村・福島, 2007）。このうち、特に身体的魅力の要因は、身体障害者に関係の深いものであり、障害者との対人関係を妨げる一要因として考えられる（河内, 2001; 島田・高木・秋庭・熊谷・清宮, 1974）。

この対人魅力を高める方法の一つとしては、従来、自己開示が取り上げられてきた（出口・吉田, 2004; 中村, 1984, 1986a, 1986b, 2003; 高木, 1992）。ここでいう自己開示とは、「他者に対して、自分自身に関する情報を言葉で伝える対人行動」のことであり（Cozby, 1972; 榎本, 1983, 1997; 小口, 2002）、中でも、障害に関する開示は「障害開示（disability disclosure）」と呼ばれている（Fichten, Lennox, Robillard, Wright, Sabourin, & Amsel, 1996; Huvelle, Budoff, & Arnholz, 1984; Joseph, Teresa, Joan, & Lilia, 2002; Noreen, Timothy, & Mary, 2003; Roberts & Macan, 2006）。しかし、障害者に対する健常者の認知を肯定的にするのに有効な情報が何かについてはほとんど検討がなされていない（Shaver, Curtis, Jesunathadas, & Strong, 1989）。このため、どのような障害開示が全盲学生の対人魅力を高めるのに有効であるかを明らかにすることが必要であろう。

ところで、自己開示によって開示者の対人魅力を高めるためには、被開示者が開示者の開示を状況にあった適切なものであると認知することが前提条件となるため、開示場面、開示者特性、開示者と被開示者との関係性を考慮することが必要である（安藤, 1986; 遠藤, 1989; 榎本, 1997; 中村, 2003; 高木, 1992）。例えば、中村（1986a, 1986b, 2003）は自己開示の対人魅力に及ぼす効果を検討するのに適切な状況として出会いの初期の対人場面で、同性の大学生が自己開示する状況を設定している。また、開示者と被開示者との関係では、親密でない同性の他者

からの自己開示は迷惑感を生じさせ、対人魅力を低下させることが見出されている（高木, 1992）。

次に、開示内容に対する認知評価にも焦点を当てる必要がある。例えば、中村（1986a, 1986b, 2003）は3つの開示条件を設定し、社会一般からみて望ましい内容（ポジティブ条件）の自己開示は、内面的な開示内容の場合に、本当の話だと認知され（真正性）、正の効果を認めたのに対し、表面的な開示内容の場合には、故意に好かれようとしていると認知され（取り入り）、負の効果が認められている。望ましくない内容（ネガティブ条件）の自己開示では、開示内容が表面的な場合よりも内面的な場合に正の効果が見られた。また、望ましい内容と望ましくない内容を同程度に含む内容（ミドル条件）の自己開示では、開示内容が内面的でもなく表面的でもない場合に正の効果が認められた。

このような問題を踏まえ、全盲学生が障害開示をする状況を設定する場合、大学生活が多く、健常学生にとって全盲学生と初めて出会う場面となるので（河内, 2006）、開示場面は大学生活とし、開示者と被開示者との関係性は初対面とすることが必要であろう（Roberts & Macan, 2006）。また、開示者の特性については、性役割によって求められる開示内容が異なることや（遠藤・竹村, 1988）、異性の開示者に対する被開示者の評価にはバイアスがかかることが多いことから（榎本, 1997）、両者の性別を同性にすることが必要であろう。

一方、開示内容については、視覚障害者が健常者からうまく援助を受けるための積極的働きかけをする内容の障害開示が効果的であるという結果が報告されていることから（Fichten, et al., 1996）、全盲学生が周囲の健常学生に積極的な働きかけをする内容（ポジティブ条件）に焦点を当てることが有効であろう。この効果を解明するためには、これとは反対の健常学生に働きかけができない内容（ネガティブ条件）と、両者の中間的内容（ミドル条件）についても、

## 全盲学生に対する対人魅力に及ぼす障害開示条件の効果

その効果を検討することが必要であろう。

そこで、本研究では異なる開示条件（ポジティブ条件・ミドル条件・ネガティブ条件）の障害開示を初対面の全盲学生がした場合、開示条件の違いが開示した全盲学生の対人魅力にどのような影響を及ぼすのかを明らかにし、全盲学生が大学生活で上手に対人関係を形成するために必要な障害開示の方法を提言することを目的とする。

なお、キャンパス交流における全盲学生に対する健常学生の態度においては、視覚障害者との接触経験の影響が重視されていることから（河内, 2004, 2006）、障害開示と対人魅力との関係に及ぼす接触経験の影響も検討する。

また、健常学生の全盲学生との交流意欲に対しては、性別の影響が広く認められていることから（河内・四日市, 1998）、障害開示と対人魅力との関係に及ぼす性別の影響についても検討を行う。

## II. 方法

## 1. 調査参加者

本調査の参加者は大学生270名（男子97名、女子162名、不明11名）であり、平均年齢は19.92歳、標準偏差は2.24歳であった。

## 2. 調査手続き

調査協力に同意の得られた学生を対象に、授業時間の一部を用いた質問紙による集合調査を実施した。質問紙は3障害開示条件のカウンターバランスを考慮し、提示する3つの障害開示文の順序を入れ替えた6種類の質問紙を作成し、無作為に配布した。実施時間は10分～15分であった。

## 3. 開示条件

本研究では、全盲の障害学生を開示者として、認知評価の異なる障害開示が対人魅力に及ぼす影響を検討するため、中村（1986a, 1986b, 2003）の規準を参考に3種類の開示条件、すなわち、ポジティブ(P)条件、ミドル(M)条件、そして、

Table 1 提示した障害開示文

Positive 条件
私は目が全く見えない大学生です。大学で困った時は、私から積極的に周囲に働きかけます。例えば、大学で呼び出しや書類の提出に関する新しい掲示がある時は、友達に連絡してくれるように頼んでいます。また、授業の休講や教室変更の時は、同じ授業を履修している友達に教えてくれるように頼んでいます。私は初めてあった人に必ず自分は目が見えないということを伝えます。周囲に積極的に働きかけているので、周囲も気を遣って接してくれます。例えば、私に声を掛ける時には、名前を名乗ってから話してくれるようお願いをしています。目が見えなくても工夫次第でやりたいことは何でもできると思っています。
Middle 条件
私は目が全く見えない大学生です。大学で困った時は、自分なりの工夫をしています。例えば、大学で呼び出しや書類の提出に関する新しい掲示があるかどうかを事務で確認しています。また、授業の休講や教室変更などの急な掲示については、事務で教えてもらいます。私は必要に応じて自分は目が見えないということを周囲に伝えます。周囲に気を遣うこともありますが、本当に困っている時は周囲が気を遣って接してくれます。私に声を掛けてきた人が誰だかわからない時は、聞き返すか、わかっているふりをして挨拶を返します。目が見えないとやりたいことでもできることとできないことがあると思います。
Negative 条件
私は目が全く見えない大学生です。大学で困った時は、戸惑うことがよくあります。例えば、大学で呼び出しや書類の提出に関する新しい掲示がある時は、自分では確認できずに見落とすことがあります。また、授業の休講や教室変更などの急な掲示については、気付かずに1時間必死に教室を探したこともあります。私は目が見えないということをあまり周囲に知られたくありません。周囲が色々気を遣ってくれても、うまくそれに応えられません。知り合いから声を掛けられた時でも、相手が誰だか自信が持てないので、無視をしてしまうこともあります。目が見えないとやりたいことでもできないことが多いと思っています。

ネガティブ(N)条件を設定した。このうち、P条件は、全盲学生が学校生活を円滑に送るために、周囲の健常学生に積極的な働きかけをしている様子の開示、M条件は、健常学生に働きかけず、事務等の公の相手には働きかけをすることで、自分なりの対応をしている様子の開示、そして、N条件は、周囲にうまく働きかけができず、視覚障害に基づく種々の困難に苦労している様子の開示とした。本調査で提示した各障害開示文は、Table 1の通りである。これらの開示文は文章量を統制した上で、視覚障害のある大学院生1名と視覚障害心理学担当の教授1名の2名で内容的妥当性が検討された。

#### 4. 測定尺度

1) 自己開示認知項目：全盲学生の異なる開示条件がどのように認知されたかを検討するため、先行研究(中村, 1984, 1986a, 1986b; 高木, 1992)を参考に、(1) 望ましさ「〇〇さんの話は社会的に望ましい」(2) 内面性「〇〇さんの話はプライベートな内容だった」(3) 取り入りの動機「〇〇さんは私の気を引こうと思ってこんな話をしたのだろう」(4) 真正性「〇〇さんの話は本当らしい」(5) 迷惑さ「こんな話をされても迷惑だ」の項目を用いた。各項目の評定尺度は「全くそう思わない」(1)～「かなりそう思う」(7)までの7件法とした。

2) 印象形成尺度：対人魅力を測定する尺度として、印象形成尺度(林, 1978)を用いた。この尺度はSD法を用いており、提示した対象が好意的な印象か否かを評価する指標として扱われてきた。項目は無気力な-意欲的な、自信のない-自信のある、卑屈な-堂々とした、かくしだてする-あけっぴろげな、かたい-やわらかい、不誠実な-誠実な、正直でない-正直な、の9つの形容詞対から構成されている。各項目の評定尺度は7件法であった。

3) 対人魅力尺度：開示者の対人魅力の程度を測定するため、中村(1988)が作成した対人魅力尺度を用いた。本尺度は、対象との直接交流に対する好意を情緒面の認知から測定する情緒的魅力尺度(11項目)と、行為面の認知か

ら測定する相互作用志向性尺度(8項目)の2つの下位尺度から構成されている。各下位尺度に含まれる項目は、情緒的魅力尺度が、話が合いそう、共感を覚える、親しみを覚える、好感を持てる、気が合いそう、賞賛したい、交際して楽しそう、一緒にいて気が休まりそう、信頼できる、気楽に付き合える、尊敬できる、であり、相互作用志向性尺度が、大切にしたい、力づけたい、援助したい、相談に乗りたい、個人的に会って話をしたい、仲良くしたい、悩みを打ち明けたい、知り合いたい、である。なお、各項目の評定尺度は「全くそう思わない」(1点)～「かなりそう思う」(7点)までの7件法とした。

#### 5. 接触経験

視覚障害者との接触経験が、視覚障害学生の対人魅力に対しどのような影響を及ぼすかを検討するため、「視覚障害のある人と話したことがありますか」という問いへの回答に基づき、本調査参加者を「月に数回以上話す」学生(以下、「接触大」, 60名)、「数回話したことがある」学生(以下、「接触小」, 112名)、「話したことはまったくない」学生(以下、「接触なし」, 87名)の3群に分割した。なお、不明は11名であった。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 異なる開示条件に対する認知評価の検討

異なる開示条件に対する認知評価の違いを検討するため、自己開示認知項目別にFriedman検定を行った。

その結果、望ましさの項目( $\chi^2(2)=286.30$ ,  $p<.01$ )、内面性の項目( $\chi^2(2)=10.75$ ,  $p<.01$ )、及び、迷惑さの項目( $\chi^2(2)=27.22$ ,  $p<.01$ )では、開示条件間に有意な差が見出された。

そこで、Scheffeの方法による対比較を行ったところ、望ましさの項目では全ての組み合わせで有意となり、平均順位は、P条件(2.65)>M条件(2.14)>N条件(1.21)の順に高いことが見出された。これに対し、内面性の項目ではP条件とN条件の間、M条件とN条件の間が有意となり、平均順位はN条件(2.16)がP条件(1.92)

## 全盲学生に対する対人魅力に及ぼす障害開示条件の効果

やM条件(1.92)よりも高いことが見出された。また、迷惑さの項目ではP条件とN条件の間、M条件とN条件の間が有意となり、平均順位は、P条件(1.80)<M条件(1.96)<N条件(2.24)の順に低いことが見出された。

一方、取り入りと真正性の項目では開示条件間に有意な差は見出されなかった。

## 2. 尺度の心理統計的検討

本調査で使用した各尺度の等質性と内的一貫性を確認するため、開示条件別に主成分分析とCronbachの $\alpha$ 信頼性係数の算出を行った。なお、等質性については、第I主成分に対する負荷量が0.40以上であること、内的一貫性については、Cronbachの $\alpha$ 信頼性係数が0.600以上であること、これらの基準に基づき信頼性の検討を行った(松井, 2006)。

1) 印象形成尺度：全9項目に主成分分析を行ったところ、全ての条件において主成分負荷量が0.40以上の項目は、「でしゃばりな-ひかえめな」と「おしゃべりな-無口な」の項目を除いた7項目であることから、本研究ではこれらを印象形成尺度項目とした。これら7項目の主成分寄与率は、P条件が45.64%、M条件が46.36%、N条件が34.35%であった。一方、Cronbachの $\alpha$ 信頼性係数の値はP条件(0.847)、M条件(0.839)、N条件(0.703)となり、すべて前述した基準を満たしていると判断した。そこで、7項目の総和を印象形成尺度得点とした。

2) 情緒的魅力尺度：全11項目に主成分分析を行ったところ、3障害開示条件の全項目において、主成分負荷量は0.40以上であり、主成分寄与率はP条件が51.57%、M条件が56.51%、N条件が61.62%であった。一方、Cronbachの $\alpha$ 信頼性係数の値は、P条件(0.920)、M条件(0.934)、N条件(0.942)となり、前述した基準を満たしていると判断した。そこで、これら11項目の総和を情緒的魅力尺度得点とした。

3) 相互作用志向性尺度：全8項目に主成分分析を行ったところ、3障害開示条件の全項目において、主成分負荷量は0.40以上であり、主成分寄与率はP条件が58.21%、M条件が62.47%、N条件が61.23%であった。一方、Cronbachの $\alpha$ 信頼性係数の値は、P条件(0.914)、M条件(0.929)、N条件(0.921)となり、前述した基準を満たしていると判断した。そこで、これら8項目の総和を相互作用志向性尺度得点とした。

## 3. 開示条件、性別及び接触経験の要因に基づく対人魅力の比較

開示条件、性別及び接触経験の要因が視覚障害学生の対人魅力にどのような影響を及ぼすかを検討するため、これら3要因別に各尺度の尺度得点を算出し、開示条件、性別及び接触経験の要因に基づく対応のある三元配置分散分析を行った(Table 2)。

1) 印象形成尺度：3要因のうち、有意な

Table 2 各尺度における尺度得点平均値と標準偏差及び分散分析の結果

尺度	接触経験	男			女			主効果		1次交互作用		2次交互作用		
		P条件	M条件	N条件	P条件	M条件	N条件	条件	性別	条件×性別	条件×接触	性別×接触	条件×性別×接触	
		Mean (SD)						F値						
印象形成尺度	接触大	35.92(8.34)	30.31(6.38)	25.69(1.75)	40.23(5.16)	33.34(5.97)	23.79(5.37)							
	接触小	38.45(5.02)	32.45(5.11)	24.24(3.73)	40.81(3.8)	33.59(5.02)	24.53(4.78)	446.78**	5.44**	1.22	5.8**	0.73	0.47	1.25
	なし	38.1(5.85)	31.93(6.26)	24.02(5.38)	39.76(6.33)	31.84(7.29)	24.09(4.68)							
情緒的魅力尺度	接触大	52.62(2.49)	45.62(2.64)	39.31(2.94)	52.57(1.31)	48.19(1.39)	39.32(1.55)							
	接触小	48.86(1.38)	47.52(1.47)	38.98(1.64)	53.21(1.07)	51.50(1.14)	38.01(1.27)	98.07**	4.02**	2.32	1.57	1.51	0.23	0.57
	なし	47.52(1.38)	44.74(1.47)	37.86(1.64)	51.31(1.34)	46.60(1.42)	38.73(1.58)							
相互作用魅力尺度	接触大	37.39(1.99)	34.92(2.05)	35.15(2.30)	39.04(1.05)	38.19(1.08)	36.43(1.21)							
	接触小	36.55(1.11)	36.83(1.14)	34.02(1.28)	38.56(.86)	38.83(.89)	36.46(.99)	7.25**	5.43**	3.62	0.89	1.13	0.02	1.49
	なし	33.45(1.11)	33.76(1.14)	34.00(1.28)	37.87(1.07)	34.98(1.10)	33.87(1.23)							

N=男性:97(接触大:13, 接触小:42, なし:42), 女性:162(接触大:47, 接触小:70, なし:45)

主効果が見出されたのは開示条件と性別の要因であった。しかし、これらの要因間には1次交互作用が見られたため、それぞれの要因について単純主効果の検討を行った。

まず、開示条件の要因における単純主効果の検定では、男子の開示条件間で有意な差が見出された ( $F(2, 96) = 184.65, p < .01$ )。そこで、Bonferroniの方法による多重比較を行ったところ、P条件とM条件 ( $p < .01$ )、P条件とN条件 ( $p < .01$ )、M条件とN条件 ( $p < .01$ ) の全ての組み合わせが有意となり、男子の印象形成尺度得点はP条件 ( $m=37.96, SD=5.90$ ) > M条件 ( $m=31.94, SD=5.79$ ) > N条件 ( $m=24.34, SD=4.35$ ) の順に高いことが見出された。また、女子の開示条件間においても、男子と同様に、有意差が見出され ( $F(2, 161) = 474.09, p < .01$ )、Bonferroniの方法による多重比較の結果、P条件とM条件 ( $p < .01$ )、P条件とN条件 ( $p < .01$ )、M条件とN条件 ( $p < .01$ ) の全ての組み合わせが有意となり、女子の印象形成尺度得点もP条件 ( $m=40.35, SD=4.99$ ) > M条件 ( $m=33.03, SD=6.01$ ) > N条件 ( $m=24.19, SD=4.91$ ) の順に高いことが見出された。次に、性別要因の単純主効果の検討をするため、3開示条件別に男女間の得点を比較したところ、P条件だけが有意となり ( $F(1, 258) = 12.16, p < .01$ )、開示者と被開示者が同性の場合に、女子の方が男子よりも印象形成尺度得点が高いことが見出された。しかし、その他の条件では性差は見出されなかった。

2) 情緒的魅力尺度：開示条件の要因と性別の要因ではそれぞれの要因における主効果が有意であった (Table 2)。そこで、Bonferroniの方法による多重比較を行なったところ、開示条件の要因では、P条件とM条件 ( $p < .01$ )、P条件とN条件 ( $p < .01$ )、M条件とN条件 ( $p < .01$ ) の全ての水準間で有意となり、P条件 > M条件 > N条件という順に健常学生の情緒的魅力尺度得点が高いことが見出された。一方、性別の要因では開示者と被開示者が同性の場合に、女子の方が男子よりも情緒的魅力尺度得点が高いことが示された ( $p < .01$ )。これに対し、接触

経験の要因については有意な主効果は見出されなかった。また、交互作用も有意でなかった。

3) 相互作用志向性尺度：開示条件、性別及び接触経験の要因についてみると、3要因とも主効果が有意であった (Table 2)。そこで、Bonferroniの方法による多重比較を行ったところ、開示条件要因ではP条件とN条件の間のみ有意差が見出された ( $p < .01$ )。ただし、M条件とN条件の間には有意傾向が見出されていることから ( $p < .10$ )、相互作用志向性尺度得点はP条件やM条件がN条件よりも高いことが示された。性別の要因では女子の方が男子よりも相互作用志向性尺度得点が高いことが見出された。接触経験の要因では、接触大と接触なしの間と ( $p < .05$ )、接触小と接触なしの間 ( $p < .05$ ) に有意差を見出した。このことから、相互作用志向性得点は接触大や接触小が接触なしよりも高いことが示された。

## IV. 考察

### 1. 開示条件に対する認知評価について

本研究では、3つの障害開示条件、すなわち、P条件、M条件、N条件における全盲学生による障害開示の内容を、先行研究 (中村, 1986a, 1986b, 2003) の規準を参考に設定し、それらがどのように認知されるかを、自己開示認知項目を用いて検討した。その結果、異なる開示条件間で有意な差が見出されたのは、望ましさ、内面性、迷惑さの項目であった。

このうち、望ましさの認知について見てみると、P条件 > M条件 > N条件の順に望ましいと認知されることが見出され、周囲に積極的に働きかけられる全盲学生ほど、健常学生が望ましいと認知することが推察された。これは見えなくて大変なのにも関わらず、積極的になれる全盲学生を健常学生が賞賛的に評価するためと解釈できる (河内, 2001)。内面性の認知については、P条件とM条件よりもN条件が内面的な内容として認知されることが見出された。これはN条件が他の条件よりも、個人の欠点、弱点、スティグマを強調する開示内容であったため、

## 全盲学生に対する対人魅力に及ぼす障害開示条件の効果

相対的には開示しにくい内面的な内容として評価されたと推察できる（榎本, 1997; 中村, 2003; 高木, 1992）。ただし、各開示条件の内面性認知得点平均値が3.74~4.05の範囲にあることから、7段階の評定値に準じて考えるとこれらの開示内容は実際には浅くも深くもない中間的な内容として認知された可能性も示唆される。この点は、障害の開示をしない統制条件を設けることにより、今後検討する必要がある。迷惑さの認知については、P条件<M条件<N条件という順に迷惑な話として認知されることが見出された。これは、健常学生の場合、困ったときに自分から周囲の人々に働きかける障害学生は迷惑とは感じにくい、援助を素直に受け入れず、苦勞している障害学生は迷惑な存在であると感じていることを示唆している。

これに対し、取り入りと真正性の認知については、有意差は見出されなかった。このうち、取り入り認知得点平均値は2.41~2.56の範囲にあり、全ての開示条件が取り入っていない側に偏っていた。このような結果は自己開示とは異なるものである。なぜなら、望ましいと認知される自己開示は、相手に好かれるために行ったと疑われるため、同時に取り入っているとも認知されやすいからである（中村, 1986a, 1986b, 2003; 高木, 1992）。本研究が先行研究と相違するのは、望ましいと認知された内容が、先行研究で扱われた開示者の長所や有能さといったものではなかったからであろう（中村, 1986a, 1986b, 2003）。つまり、困ったときに自分から周囲の人々に働きかける全盲学生の姿は望ましいものであったとしても、健常学生にとっては当たり前前の全盲学生の姿であったと推察できる。一方、真正性認知得点平均値の範囲は5.74~5.78であり、全ての開示条件が本当の話として認知される傾向にあったと推察できる。これは、開示者が障害者であったためとも推察されるが、この点についても統制条件を用いて、今後検討することが必要であろう。

## 2. 開示条件、性別及び接触経験が対人魅力に及ぼす影響

本研究では、開示条件、性別及び接触経験の要因が視覚障害学生の対人魅力に及ぼす影響について検討をするため、各尺度について、3要因に基づく対応のある三元配置分散分析による比較を行った。

1) 開示条件要因が対人魅力に与える影響：異なる開示条件が対人魅力に及ぼす影響については、情緒的魅力尺度と相互作用志向性尺度において有意な主効果が見出され、印象形成尺度においては単純主効果が見出された。

まず、印象形成尺度と情緒的魅力尺度の結果をみると、P条件>M条件>N条件の順に全盲学生への対人印象は好意的に評価され、全盲学生との直接交流に対して「話が合いそう」とか「共感を覚える」といった感情的側面の認知が好意的になることから、周囲に積極的に働きかける様子を全盲学生が開示するほど、健常学生への全盲学生に対する対人魅力は増大することが明らかとなった。これは周囲に積極的に働きかける全盲学生を健常学生が望ましいと認知されるためであり、望ましい内容の開示ほど対人魅力が増大するという先行研究の結果を支持するものである（中村, 1986a, 1986b, 2003; 高木, 1992）。

一方、相互作用志向性尺度の結果をみると、全盲学生との直接交流に対する「援助したい」とか「相談に乗りたい」といった行動面の認知については、P条件とM条件がN条件よりも好意的であることが明らかとなった。これはP条件やM条件の全盲学生が大学職員や周囲の学生に対する援助要請を積極的にできるのに対し、N条件の全盲学生は、援助要請ができないという開示内容であったためと考えられる。なぜなら、全盲学生との交流の仕方に戸惑ってしまう初対面の健常学生にとっては、援助要請を行う全盲学生のように、関わり方を提示できる者が友人として選択されやすいからである（Fichten, et al., 1996）。逆に、全盲学生が単に苦勞している様子を開示するだけでは、健常学生の持つ交流への戸惑いを助長させ、結果的に健常学生から迷惑と認知されてしまうため、友人とし

ては付き合いにくい者と思われる可能性が危惧される。

したがって、全盲学生が周囲と上手に対人関係を構築するためには、障害の説明や援助要請を含む障害開示を積極的に行うことで、周囲にどう関わったらよいかを理解してもらう必要がある。

2) 性別の要因が対人魅力に与える影響：性別の要因が対人魅力に及ぼす影響については、情緒的魅力尺度と相互作用志向性尺度において有意な主効果が見出された。

まず、印象形成尺度についてみると、単純主効果の検討の結果、P条件のみに有意差が見出された。ここでは、周囲の健常学生に積極的に働きかける同性の全盲学生に対する対人印象について、女子は男子よりも好意的であることが示された。

次に、情緒的魅力尺度と相互作用志向性尺度の結果をみると、同性の全盲学生との直接交流に対して、感情面・行動面共に女子の方が男子よりも好意的であるため、打ち解けやすく、援助に意欲的であることが明らかとなった。このようなことから、開示者と被開示者の関係は、女子同士の方が男子同士よりも対人魅力に与える影響の強いことが明らかとなった。これは青年期の対人関係において、女子は自己開示を重要視しており、相手からの開示に興味や理解を強く示すのに対し、男子は自己開示を軽視しており、自己開示をあまり信用しない傾向を持つためと考えられる (Derlega, Margulis, Metts, & Petronio, 1993)。また、本研究で取り上げた障害開示のような自分の弱い面をさらけ出す行為は、同性の男性から見れば性役割に反する不適切な行為であるが、同性の女性から見れば性役割に合致した行為であるため (遠藤・竹村; 1988榎本, 1997), 女子同士の方が男子同士よりも障害開示を好意的に受け入れたと推察される。

したがって、女子の全盲学生が周囲と上手に対人関係を構築するためには、まず同性の女子学生に障害開示をすることが効果的であろう。

3) 接触経験の要因が対人魅力に与える影響：接触経験の要因が対人魅力に及ぼす影響については、相互作用志向性尺度だけに有意な主効果が見出され、接触なしは接触大及び接触小よりも尺度得点が有意に低く、接触経験がない人は、全盲学生との直接交流に対する行動面の認知が好意的でないため、援助に意欲的でなく、障害者と深く関わることに抵抗感が強いことが示された。このような結果は、障害者との接触経験の多い人は援助への抵抗感が低いという結果 (河内, 2003, 2006) に対応しており、障害者との接触経験が対人関係において重要であることが明らかとなった。

したがって、大学生生活で全盲学生が周囲と上手な対人関係を構築するためには、まず、視覚障害者との接触経験を持つような健常学生に障害開示をすることが効果的であろう。

4) まとめと今後の課題：以上のことから、本研究においても先行研究と同様に (Fichten, et al., 1996; Huvelle, et al., 1984; Joseph, et al., 2002; Noreen, et al., 2003; Roberts & Macan, 2006), 障害開示が健常者との対人関係に正の効果を及ぼすことが明らかとなった。特に、同性で初対面の健常学生に対しては、関わり方を示唆することができるため、積極的に障害の説明や援助要請を行う障害開示が効果的であろう。また、そのような障害開示を全盲学生が行なう場合、開示者と被開示者の関係は、女子同士の方が男子同士よりも効果的であるため、また、視覚障害者との接触経験を持つの方がそうでない者よりも効果的であるため、性別や視覚障害者との接触経験を考慮した開示相手の選択が重要であろう。

最後に、本研究では開示者の設定を被開示者の健常学生と同性で初対面の学生としたため、異性の開示相手に対する障害開示の効果を検討することができなかった。しかし、全盲学生との交流に対する健常学生の抵抗感には性差が見られることから (河内・四日市, 1998), 今後はこの点についても検討をしていく必要がある。また、本研究では対人関係を規定する対人



## 全盲学生に対する対人魅力に及ぼす障害開示条件の効果

魅力に障害開示が及ぼす影響については検討を行ったが、障害開示と対人魅力と援助行動がどのような関係にあるのかについては検討することができなかった。障害開示を用い、全盲学生の対人魅力を高め、全盲学生と健常学生の対人関係を構築し、全盲学生が大学生活を円滑に送るために必要とされる支援関係を構築するためには、この点についても今後検討をする必要がある。

## 付記

本論文は、平成18年度～20年度の科学研究費（基盤研究（C）課題番号18530745）「障害学生との交流に対する健常学生の支援意欲向上教育プログラム作成への包括的研究」の研究の一環として、富田朝未が筑波大学第二学群人間学類の卒業研究で行ったものを、河内清彦の指導の下、富田朝未と相羽大輔が再編集、再分析したものである。

## 引用文献

- 安藤清志（1986）対人関係における自己開示の機能。東京女子大学紀要論集, 36(2), 167-199.
- Cozby, P. C. (1972) Self-disclosure, reciprocity, and liking. *Sociometry*, 35, 151-160.
- 出口拓彦・吉田俊和（2004）自己開示の内面性が対人魅力に及ぼす影響－被開示者における対人的志向性の効果に関する縦断的研究－。対人社会心理学研究, 4, 51-56.
- Derlega, V. J., Margulis, S.T., Metts S., & Petronio, S. (1993). *Self-disclosure*. Newbury Park : Sage. (ダークレガ, V. J., マーグリズ, S. T., メッツ, S., & ペトロニオ, S. 斉藤勇・豊田ゆかり（監訳）（1999）. 人が心を開くとき・閉ざすとき－自己開示の心理学－ 金子書房）.
- 遠藤公久（1989）開示状況における開示意图向と開示規範からのズレとの関係について－性格特徴との関連－。教育心理学研究, 37, 20-28.
- 遠藤公久・竹村研一（1988）自己開示の評定に及ぼす個人差の影響。筑波大学心理学研究, 11, 49-56.
- 榎本博明（1983）対人関係を規定する要因としての自己開示研究。心理学評論, 26, 146-162.
- 榎本博明（1997）自己開示の心理学的研究。北大路書房.
- Fichten, C. S., Lennox, H., Robillard, K., Wright, J., Sabourin, S., & Amsel, R. (1996) Attentional Focus and Attitudes Toward Peers with Disabilities: Self Focusing and A Comparison of Modeling and Self-Disclosure. *Journal of Applied Rehabilitation Counseling*, 27(4), 30-39.
- 林文俊（1978）対人認知構造の基本次元についての一考察。名古屋大学教育学部紀要, 25, 233-247.
- Huure, T., & Aro, H. (2000) The psychosocial well-being of Finnish adolescents with visual impairments versus those with chronic conditions and those with no disabilities. *Journal of Visual Impairment and Blindness*, 94, 625-637.
- Huvelle, M. F., Budoff, M., & Arnholz, D. (1984) To tell or not to tell: Disability disclosure and the job interview. *Journal of Visual Impairment and Blindness*, 78, 241-244.
- Joseph W. M., Teresa E. F., Joan M. M., & Lilia M. R. (2002) Employment self-disclosure of postsecondary graduates with learning disabilities: rates and rationales. *Journal of Learning Disabilities*, 35, 364-369.
- 川間健之介（1996）障害をもつ人に対する態度－研究の現状と課題－。特殊教育学研究, 34(2), 59-68.
- 河内清彦（1990）学生および教師の視覚障害者観。文化書房博文社.
- 河内清彦（2001）視覚障害学生及び聴覚障害学生に対し大学生が想起するイメージの意味構造－性及び専攻学科との関連－。教育心理学研究, 49, 81-90.
- 河内清彦（2002）視覚障害学生の学業支援サービスに対する大学生の意識構造－自己効力感、視覚障害者観、ボランティアイメージおよび支援意欲との関連－。特殊教育学研究, 39(4), 33-45.
- 河内清彦（2003）「障害学生との交流自己効力感汎用型尺度」の妥当性の検討－聴覚障害および視覚障害条件の影響について－。特殊教育学研究, 40, 451-461.
- 河内清彦（2004）障害学生との交流に関する健常大学生の自己効力感及び障害者観に及ぼす障害条件、対人場面及び個人的要因の影響。教育心理学研究, 52, 437-447.
- 河内清彦（2006）障害者等との接触経験の質と障

- 害学生との交流に対する健常学生の抵抗感との関連について－障害者への関心度、友人関係、援助行動、ボランティア活動を中心に－. 教育心理学研究, 54, 509-521.
- 河内清彦・四日市章 (1998). 感覚障害学生とのキャンパス内交流に対する健常学生の自己効力に関する検討 教育心理学研究, 46, 106-114.
- 国立大学協会第三常置委員会 (2001) 国立大学における身体に障害を有する者への支援に関する実態調査報告書. 国立大学協会事務局.
- 松井豊 (2006) 心理学論文の書き方. 河出書房新社.
- 中村雅彦 (1984) 自己開示の対人魅力に及ぼす効果. 心理学研究, 55, 131-137.
- 中村雅彦 (1986a) 自己開示の対人魅力に及ぼす効果 (2) - 開示内容の望ましさの要因に関する検討 - . 実験社会心理学研究, 25, 107-114.
- 中村雅彦 (1986b) 自己開示の対人魅力に及ぼす効果 (3) - 開示内容次元と魅力判断次元の関連性に関する検討 - . 心理学研究, 57, 13-19.
- 中村雅彦 (1988) 非類似者の他者に対する魅力 - 評価者の寛容的対人態度に関する検討 - . 実験社会心理学研究, 27, 121-130.
- 中村雅彦 (2003) 対人魅力の形成. 西日本法規出版.
- 日本学生支援機構 (2007) 平成18年度 (2006年度) 大学・短期大学・高等専門学校における障害学生の修学支援に関する実態調査結果報告書. 日本学生支援機構.
- Noreen M. G., Timothy P. J., & Mary. H (2003) Rehabilitation counseling student disclosure of disability and use of educational accommodations. *Rehabilitation Education*, 4, 224-236.
- 小口孝司 (2002) 自己開示. 古畑和孝・岡隆編, 社会心理学小事典. 有斐閣, Pp.88.
- 奥田秀宇 (2002) 対人魅力. 古畑和孝・岡隆編, 社会心理学小事典. 有斐閣, Pp.155-156.
- Roberts, L. L., & Macan, T. H. (2006) Disability disclosure effects on employment interview ratings of applicants with nonvisible disabilities. *Rehabilitation Psychology*, 51, 239-246.
- Shaver, J. P., Curtis, C. K., Jesunathadas, J., & Strong, C. J. (1989) The modification of attitudes toward persons with disabilities: Is there a best way? *International Journal of Special Education*, 4(1). 33-57.
- 島田睦雄・高木美子・秋庭信夫・熊谷信順・清宮栄一 (1974) 心身障害者の職業に対する雇用主等の態度 (2) - Semantic Differential法の結果 - . 職業研究所研究紀要, 6, 39-51.
- 潮村公弘・福島治編 (2007) 社会心理学概要. 北大路書房.
- 高木浩人 (1992) 自己開示行動に対する認知と対人魅力に関する研究 - 親密な関係と親密でない関係の比較 - . 実験社会心理学研究, 32, 60-70.

— 2009.9.1 受稿、2009.12.7 受理 —

## The effects of disability disclosure by the blind students on interpersonal attraction

Asami TOMITA\*, Daisuke AIBA\*\*, and Kiyohiko KAWAUCHI\*\*\*

The purposes of the present study were to examine the effects of disability disclosure on interpersonal attraction for the blind students. After showing three kinds of disability disclosure conditions (positive, middle and negative condition), nondisabled college students ( $N = 270$ ) answered a questionnaire based on interpersonal attraction scales that asked about students with blindness.

Analysis using ANOVA revealed that the score of interpersonal attraction scales found to be high in order of positive, middle, and negative conditions. Particularly, positive condition was more benefit than the other disability disclosure conditions. On the other hand, gender factor and contact factor significantly influenced the score of interpersonal attraction scales. If discloser and perceiver are the same sex, the female score of interpersonal attraction scales was higher than the male one. And the score of students who had contact with persons with visual impairment was higher than the those who had no contact with them.

In conclusion, it is suggested that disability disclosure of students with blindness should be a useful means of improving social interaction between students with and without visual impairment.

**Key Words:** interpersonal attraction, self-disclosure, disability disclosure, students with blind, ordinary students

---

\* Association of Education, psychology, and social welfare of the visual inpairment

\*\* Graduate course of Disability Sciences, University of Tsukuba

\*\*\* Graduate School of Comprehensive Human Sciences, Institute of Disability Sciences, University of Tsukuba